

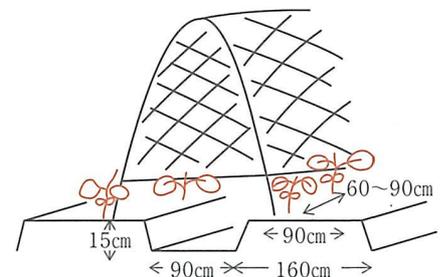
施肥例

(a 当り)

うねつくり

肥料名	基肥	追肥	備考
堆肥	400kg	—kg	成分量
苦土石灰	12	—	窒素 3.2~3.5kg
CDU-S682 (16-8-12)	14	—	リン酸 2.4~2.6
苦土重焼燐	6	—	加里 2.5~2.8
燐硝安加里 S604	—	6	追肥は 3~4 回に分けて行う。

(ネット支柱栽培)



雑草対策 グリーンマルチか黒マルチを行い、雑草の発生を抑える。

トンネルとマルチ 活着の良否は側枝の発生や、その後の生育に大きく影響するので、定植の10日前までにマルチとトンネルを行い、活着に必要な地温(15℃以上)を確保する。

■**定植** トンネル栽培の場合は4月下旬~5月上旬、夏秋栽培の場合(接ぎ木苗)は、5月下旬~6月上旬、晴天日が2~3日続く日を選び、午前中に行う。ベッドが乾燥している場合は、植え穴に十分かん水してから植え付けする。接ぎ木苗は定植の際接ぎ木した部分に土を付けないように慎重に浅植えする。植え付け後は埋め戻した土と根鉢をよく密着させるため株元を中心にていねいにかん水する。

風除け対策 5月から6月にかけては、しばしば突風が吹き、トンネルの破損や、茎葉の損傷が問題となるので風上に防風網を設置する。

■**定植後の管理**

かん水 根鉢から根が伸びるまで根鉢部分が乾燥するので、定植後5~7日位の間には第1回のかん水を行う。トンネル期間中に3~4回行う。

トンネル管理 定植後、寒い日が続くようであれば活着までトンネルを密閉し、地温を高め新根の発生を促す。日中の高温障害を防ぐため日覆いを行う。

逆に高温が続くようであれば、風上のトンネルのビニールを埋めて、風下のすそを換気し、トンネル内の気温が30℃以上にならないよう管理する。夜間はこもや保温資材をかけて、最低気温10℃以上を確保する。

保温資材としては、一般にこものかわりに不織布を使用しているが、強い霜に対しての保温効果は絶対的なものではないので、こもや保温マットを準備する。

活着後は徐々に換気量を多くし、トンネル除去の2~3日前から全開し、露地状態に苗を順化させ、つる上げ時の障害を防ぐようにする。

トンネル除去は、晩霜の心配がなくなってから行うのが安全である。

支柱立て 晩霜のおそれがなくなる5月下旬~6月上旬に行う。支柱はトンネル除去前に立てておくようにする。

つる上げ 晴れた無風の日に行い、葉の裏を出さないようつるをていねいに扱い誘引する。寒い日や風のある日に行うと、茎葉や幼果が障害を受けるので絶対に行わない。

敷きわら つる上げ後は通路に追肥し、耕うん、うね立てを行い、降雨による泥のはねあがりや乾燥、雑草発生の防止のため敷きわらを行う。

整枝 トンネル内で7節までの側枝は小さいうちに除去する。8～10節の側枝は1節で摘心し、11節以降の側枝は2節で摘心する。

露地栽培の場合は5節までの側枝の雌花は小さいうちにかき取る。株間が60cmの密植、早期取りでは、7月末まで6節以降の側枝は、2節で摘心し、孫づるも2節で摘心する。

8月上旬以降は放任する。株間が90cmの長期取りでは、6節以降の側枝はすべて放任する。

つるの誘引 トンネル内では主枝を一方向に誘引し、つる上げ時の茎葉の損傷を防ぐようにする。

つる上げ後、つるの伸長が非常に早く、誘引が遅れると風で折れたり巻きひげがからみ作業がしにくくなるので4～5日ごとに行う。

主枝の摘心は30節位で行う。パイプの天井部から30cm位下のところで行い、下葉に十分光が当たるようにする。

適葉と適果 葉は同化作用を行い、果実を肥大させる重要な機関であるが、葉が重なり合うようになると養分の消耗のほうが大きくなる。葉が展開してから45～50日位経過したものは同化能力が低下するので、古い葉を摘葉し同化能力の高い若い葉に十分光が当たるようにする。一度に多くの葉を摘葉すると草勢を悪くするので、1回の摘葉は株当たり1～2葉にする。

曲がり果などの不良果は早く摘果し株の負担を軽くする。

病虫害防除 ベと病は肥切れ、斑点細菌病、アブラムシは軟弱徒長で激発しやすい。

■収穫・収量

収穫期 6月上旬～9月下旬で収穫は朝夕の涼しい時に行うようにする。収穫は1果80～100gで行う。収量は1a当たり800kg。